

〈黄帝と老子〉雑観 第6回

『黄帝内经』と戦国黄老の気の系譜

『黄帝四経』から『春秋繁露』まで

『黄帝内经』 研究家 松田博公

ツイート 2

第1回 [黄帝は誰のことかと黄帝は言い 『黄帝内经』は天人合一の医書である](#)第2回 [『黄帝内经』は養生の書にあらず](#)第3回 [『黄帝内经』はタオの医学書なのか? 『老子』『荘子』そして『荀子』](#)第4回 [『黄帝内经』に近いのは『老子』か『荘子』か
重層的な無の宇宙論と遍満する気の宇宙論](#)第5回 [勃興する戦国黄老思想 『黄帝内经』への遙かな道](#)

黄老思想は複合的に構築されているが、しっぽをつかみやすいのは、儒家思想の要素である。旗印である仁・義の語彙は目立つ。『老子』のキーワード「無為自然」も、すぐさま目に入る。しかし、この「無為自然」が元の『老子』と異なり、君主は無為で臣下は有為と、役割分業論に変容していることは知っておかなくてはならない。法家の刑名思想も読めばすぐに分かる。いちばん分かりにくいのは、「黄帝」思想である。

いったい、黄老文献のどの個所が「黄帝」思想なのか、それが明確でなければ、黄老思想の全体像を浮き彫りにできない。黄老思想研究が定着し、論文、単行本が溢れる中国でも、肝腎の「黄帝」思想とは何かを深く追究した研究には、まだ遭遇していない。目に入るのは、「黄帝」思想ではなく、「黄帝」とは何者かを史書、伝説に探る議論ばかりである。それらによれば、黄帝は神話上の帝王であり、軍事英雄であり、天文学、医学、暦学など諸々の技芸を創造した発明王であり、修行を達成し天に登った仙人であった。このように多ジャンルにまたがる総合的カリスマだったので、第1回で述べたように、『漢書』芸文志の目録には「黄帝」に仮託した政治書、兵書、医学書、暦書、房中書、神仙書などがたくさん記録されているというのが、大方の理解なのである。

こうした研究の水準を大きく超えて、「黄帝」思想そのものの構造を照



今週号のPRの部屋はこちら

●変形徒手矯正術セミナー (2014/7/6)

●ダイエット・アロママッサージセミナー (2014/8/24)

■ヒューマンワールドのセミナー

●[クリニカルストレッチセミナー](#) (2014/10/5)●[あはき師のための在宅ケア実践セミナー](#)

(2014/9/14,15)

★ヒューマンワールドの本なら→→→→→ [こちら](#)★ヒューマンワールドのDVDなら→→→→→ [こちら](#)

■投稿原稿募集

週刊『あはきワールド』では、研究レポート、論説、症例報告、エッセーなどの投稿原稿を募集しています。

らし出す仮説を大胆に提出し、いまなお屹立しているのが、同じく第1回で紹介した浅野裕一の700ページを超える労作『黄老道の成立と展開』（創文社、1992）である。浅野は、この研究で『黄帝四経』と目される馬王堆漢墓帛書『経法』『十六経』『称』『道原』の4書を横断的に分析し、そこには、日月星辰、陰陽四時の周期性を天の理法と捉え、この恒常的な「天道」を規範に政事、人事を行えば国は栄え、そうしなければ亡びるとする「天道思想」が一貫しており、これこそが「黄帝」思想であった。

天道思想は既に、古い周代の歴史を記した『国語』越語下篇の越国の名宰相・范蠡の言行に現れ、范蠡は、政治、軍事の助言を行う際、必ず天地の循環する法則性に則り国力を養うことを唱え、天の意に反すれば災いが下ると天人相関思想を主張していたという。范蠡はまた、「満を持す」「盛んなるも驕らず」「労するもその功に矜（ほこ）らず」など、『老子』に近似した処世訓を語るが、浅野はこの范蠡言が『老子』の形成に影響を与え、また齊国に伝わり稷下黄老学の思想的淵源になったと考えるのである。

浅野のこの結論は、『黄帝内経』とはどんな書物かを知りたいわたしたちに、百万の援軍を与えてくれる。浅野のいうように、『黄帝四経』が天道思想に則る政治書であり、この天道思想の宇宙論的本質が『老子』書と並んで戦国末期に一大思潮となった黄老思想を形づくり、それが「黄帝」思想だったのなら、『漢書』芸文志の「黄帝」書は、ジャンルにかかわらず天道思想に則り事を行う書物であったと推測することができるからである。

例えば、「陰陽兵家」に分類されている『黄帝』十六篇、図三卷や『鬼容区』三篇、図一卷、黄帝臣、依託などは、天地の気の循環、四季の運動法則に合わせて戦争をする兵法学であり、「雑占家」の書とされている『黄帝長柳占夢』十一卷は、天地の気の運動法則である陰陽論、五行論を適用した夢占いであり、「房中家」の『黄帝三王養陽方』二十卷は、天地宇宙の気と一体になるセックス技法の書であるという具合である。

同様に、われわれの関心の的である「医経家」に分類されている『黄帝内経』十八卷、『外経』三十九卷は、天の法則、地の法則に則り医療を行う天人合一の医書であることになる。つまり、中を読まなくても、「黄帝」というタイトルから内容を推し量れる。こうして、わたしたちは、浅野の手助けを借りて、これまで日中の『内経』研究者がだれも言わなかった見解に到達した。すなわち、『黄帝内経』の「黄帝」という命名は、神話上の帝王に仮託して権威づけることを超えて、天道に則る医書であるという宣言だったのである。

もちろん、『漢書』芸文志の『黄帝内経』は亡失し、それ自体を知ることとはできない。とはいえ、この原『内経』の性格は、現存の『素問』『靈

★詳細は≫≫ [こちら](#)

★メディカル求人天国
鍼灸マッサージ師・柔道整復師の求人情報は≫≫ [こちら](#)

■ヒューマンワールドのメールマガジン「あはきワールド」は毎週水曜日に配信しています。

★配信登録は≫≫ [こちら](#)

枢』に引き継がれているだろう。いや、ほんとうにそうだろうか。この連載をお読みいただいた読者の方は、既に判断をお持ちであろうが、この仮説の妥当性について、これから時間をかけて検討してみたいのである。

◇『黄帝四経』の初期「気」一元論

道筋は、戦国末の『黄帝四経』から『管子』『呂氏春秋』へ、そして前漢中期の『淮南子』『春秋繁露』へと古代文献を巡り、そこに盛り込まれた黄老思想が現存の『黄帝内経』（『素問』『靈枢』を総称して便宜的にいう）といかに関係しているかを問うことである。

それは、現代中医学の教科書が採用する、『素問』『靈枢』に影響を与えた諸子百家の思想を、陰陽家、道家、儒家、さらに兵家と、相互の脈絡なくバラバラに検討する方法に終止符を打ち、『内経』思想史に諸子百家統合の見方を持ち込む作業でもある。わたしたちは、戦国末以降の歴史の事実にとつた理解をしたいのである。そのために、『黄帝四経』の気思想を最初に見ておこう。『黄帝内経』が気の医学書であり、同様に『春秋繁露』から『管子』にさかのぼる古代文献が、宇宙の万物は気が生んだとする観念に貫かれていることは周知の通りである。では、その前の『黄帝四経』はどうだったのか。それを確認することは、気思想の変遷と『黄帝内経』の源流を知るうえで重要だからである。

それを踏まえて、黄老思想の軸である「黄帝」思想すなわち古代天道思想の、『黄帝四経』から（現存の）『黄帝内経』に至る流れを点検する。周代に始まる古代天道思想には、①天を人格神と捉え、悪い政治を行えば罰が下るといふ災異説の要素と②天をあたかも陰陽、五行、循環の法則が貫かれた自然の天とする機械論的宇宙論の要素がある。浅野が示唆するように、『黄帝四経』にはこれら①②の両者が結び付いていた。『管子』『呂氏春秋』『淮南子』と時代が下るにつれて②の機械論的宇宙論が主調となる。ところが、前漢中期、董仲舒編とされる『春秋繁露』の天道思想では、機械論的宇宙論を精緻にしつつ、一転して①の災異説のリバイバルを図っている。こうした思想史の系列の先に、あるいは同時に、『黄帝内経』の天道思想を位置づけてみたいのである。

BC168年埋葬の馬王堆漢墓から出土した『黄帝四経』を、浅野は、BC250、260年頃の著述と考えている。ちょっと古く考えすぎではないかとも思えるが、そのことには触れない。いずれにせよ、『管子』よりも前の書物と考えられる。台湾の道教学者、陳鼓応の『黄帝四経今注今釈』（商務印書館、2007）によれば、『黄帝四経』には、「気」の文字はわずか5箇所ほど現れるだけで、それらは地気、夜気、血気、雲気など具体的な事物を指し、まだ哲学的、抽象的な概念になっていないという。これは、銘記すべき指摘である。気思想という点では、『黄帝四経』は気概念があふれる『黄帝内経』の直接の起源とはいえずにない。しかし、下に示すように、『黄帝四経』には、天地の「気」が働いて万物を形成するとい

う気一元論の初期的な表現が見られる。また血気のうっ滞が疾病を形づくるという気の病因論が記述されている。

「天（気）の精微なるを得て、地気の発するを待てば、すなわち萌え出ざるべきものは萌え出で、撃（＝持ち上がるべき）ものは持ち上がる。天に因（よ）るならばこれ成る。因らなければ成らず、（地が）養わなければ生ぜず」（『十六経』観）

「怒りは内在する血気的作用による。鬭争は外在的な脂肪、皮膚的作用による。怒（気）を発散させることなくうっ滞すれば、癰疽となる」（『十六経』五正）

ここには気の思想の体系的展開はないが、のちに『黄帝内经』において、「天にありては気となり、地にありては形と成り、形と気、相感じて万物を化生す」（『素問』天元紀大論篇）と語られる気の生命論や気血の変調による病因論の原初的な説明が、すでにある。しかも、ここで語られる天気と地気の二者が共同して万物を生むという記述は、天地が至高の存在であり、それ以上のものはないことを示している。次回、天道思想の項目でもう一度確認するが、天地の背後に深遠な生命のるつぼ、無の深淵を設定する『老子』の重層的宇宙論とは異なる。道家とはいえ別系統で、後期『莊子』の系列なのである。『老子』と後期『莊子』『黄帝内经』では宇宙論が違くと、前回述べたが、宇宙の根源を無ではなく、気であるとする「気一元論」の枠組みにおいて、『黄帝四経』は『黄帝内经』の遠い祖先であることは間違いない。

◇「精」から「精神」へ

『黄帝四経』の気の思想は初期段階だが、それが『管子』に至ると一挙に飛躍する。『黄帝四経』も、『管子』も、勃海湾に面し商業で繁栄した戦国七雄の一つ齊国の稷下の学の成果とされている。大部の文献である『管子』は儒家、道家、法家、名家など諸思想混在の性格が不明とされ、偽書の疑いも挟まれてきたが、いまでは黄老文献と見る研究者が多い。『管子』は、万物の根源を「気の精なるもの」である「精」と設定し、精緻な気の哲学を展開する。その抽象度は、『黄帝四経』の水準を次のように、大きく離脱している。



「およそ物の精、化すれば則ち生をなす。下は五穀を生じ、上は列星となる。天地の間に流（し）く。これを鬼神という。胸中に蔵する、これを聖人という」「故に化気なり。化すれども気をかえず」（『管子』内業）

篇)

「人の生は天その精を出し、地その形を出し、合わせて人となす。和すればすなわち生じ、和せざれば生ぜず」「精は気の精なるものなり」(内業篇)

「およそ食の道は大いに充つれば、形傷れて蔵せず。大いに節すれば骨枯れ血凝(こ)る。充節の間これを和なるという。精の舍るところにして、知の生ずるところなり」(内業篇)

「気を専らにすれば神のごとく、万物つぶさに存す。よく専らならんか。よく一ならんか。よく卜筮なくして吉凶を知るか。これを思いこれを思い、また重ねてこれを思う。これを思いてしかも通ぜずんば、鬼神、特にこれを通ぜんとす。鬼神の力にあらざるなり。精気の極なり」(内業篇)

「精」ないし「精気」は、宇宙と体内を環流する根源的な生命力、生命的要素だが、その概念は、宇宙論として考案されただけではない。君主が体内に保持する精微な気を守り身を調えることで一国を安泰にし、天下に君臨するための修養のためにも認識されたのである。それを得て、戦国末の生命論、病因論、養生論は大きく羽ばたく。斉国の衰退を睨みつつ天下統一を控えた秦国で、宰相・呂不韋が編纂したこれまた大部の『呂氏春秋』は、この「精気」思想を引き継ぐ。『呂氏春秋』は『漢書』芸文志では「雑家」に分類され、百科全書などの的外れな見方をされてきたが、現在は戦国末の諸子学派統合の動きを体現した黄老書とするのが趨勢である。「精気」に関する個所から引用してみよう。

「何をもって天道の円なるを説くや、精気一上一下し、円周複雑として係留するところなし。故に天道は円なりという」(『呂氏春秋』季春紀・円道)

「流水腐らず、戸枢蠹せざるは、動けばなり。形気も亦た然り。形動かざれば則ち精流れず。精流れざれば則ち気鬱す。鬱、頭に居れば腫をなし、風をなす」(季春紀・尽数)

「凡そ人の三百六十節、九竅五蔵六府、肌膚は其の比(=秘、緻密)ならんことを欲し、血脈は其の通ぜんことを欲し、筋骨は其の固ならんことを欲し、心志は其の和せんことを欲し、精気は其の行らんことを欲するなり。此の若ければ則ち病居る所無くして、悪由りて生ずること無し。病の留まり、悪の生ずるは、精気鬱すればなり」(侍君覽・達鬱)

「およそ事の本はまず身を治む。その大宝(=からだ)をおしみ、その新を用い、その陳を棄てれば(=新しい気を吸い、古い息を吐けば)、腠理遂通し、精気日に新たに、邪気ことごとく去り、その天年に及ぶ(=全うする)。これをこれ真人という」(季春紀・先己)

『呂氏春秋』が『管子』から継承した「精気」思想が、わたしたちの『黄帝内経』と密接な関係がありそうなことは、『黄帝内経』の経文をちょっとかじった者には一目瞭然である。この系譜は、秦の後の帝国を経営した前漢に編纂された『淮南子』および『春秋繁露』にそのまま流れ込ん

でいる、と言いたいところだが、事情はもう少し複雑である。

漢帝国成立後、60年ほどの武帝時代（BC140年—BC87年）、南方の淮南国に封じられていた劉安は、道家を主とする学者集団を組織し、宇宙と人生の真理を基礎に、道家、儒家、法家、その他の学説を総合し、BC139ごろ、『淮南子』をまとめた。この書も、いまでは黄老文献とする研究者が多い。平岡禎吉著『淮南子に現れた氣の研究』（理想社、1961）によれば、『淮南子』は前漢中期に至る書物の中で「天氣」「地氣」「陰氣」「陽氣」「春氣」「蒸氣」「神氣」「生氣」「養氣」「望氣」などの「氣」の字を最も多く使用している。『論語』4、『莊子』39、『管子』108、『呂氏春秋』85に対して、『淮南子』204だという。それを踏まえつつ、平岡は述べる。

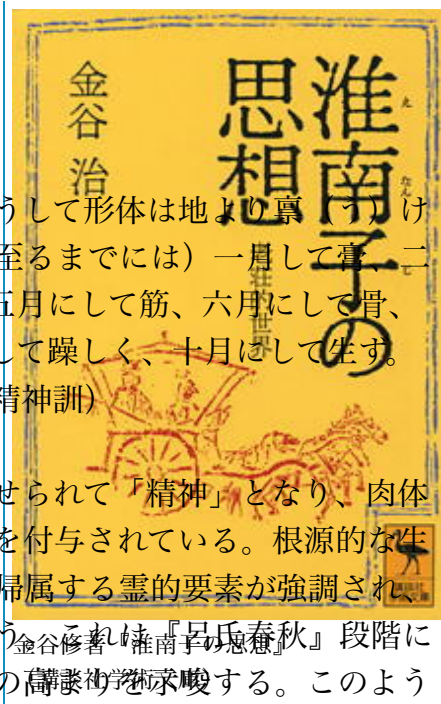
「『黄帝内経素問』の成立は殆ど淮南子と同時と考えられ、…而してこの二書は、構想上や、あるいは修辞面よりして類似するところが極めて多い。…この大部分は中心構想に於て又文章に於て、淮南子と一致し、しかも淮南子が他書とは異っても、この素問とは同一であることが多いのは、其の時代と思想が相通ずるものあるを示すものであろう。素問は病と氣を説く医書である。病を医するには氣を治めるに在り、これ氣の研究に本書（『素問』）の果たす役割の重大となす所以である」

平岡の解釈の妥当性は、今後、『黄帝内経』と『淮南子』の文章を比較しながら検証する。ここでは、「精氣」思想が、『淮南子』でどう変容したかを瞥見し、「事情はもう少し複雑」であることを知るにとどめる。思想は時代と共に複雑になり単純になり分化し一部が肥大化する。そこが思想史の面白いところである。『管子』『呂氏春秋』では、「精」は宇宙の万物生成の根源素であった。（中医学なら根源物質というだろうが、わたしは中国古代人は、氣や精を物質ではなく、いのちを持った生命素と考えていたと思うので、根源素と呼ぶ。）『淮南子』は、この捉え方を引き継いでいるが、一番活躍する「精」の概念は、「精」と「神」を連用した「精神」である。それは、以下のような使われ方をする。

「古（いにしえ）、いまだ天地あらざるの時、惟だ像あるのみにして形なく……、二神ありて混生し、天を経し地を営み……、ここにおいてすなわち別れて陰陽と為り、離れて八極と為り、剛柔相い成り、万物すなわち形（あらわ）る。煩氣（＝乱雑の氣）は虫（＝動物）と為り、精氣（＝純精の氣）は人と為る。このゆえに精神は天の有（＝持ち物）にして骨骸は地の有なり。精神其の門に入て骨骸其の根に反（かえ）れば、我なお何ぞ存せん。このゆえに聖人は天に法り地

に順い、俗に拘わらず人に誘われず、天をもつて父と為し地をもつて母と為し、陰陽を綱と為し四時を紀と為す」（『淮南子』精神訓）

「夫れ精神は天より受ける所なり。しこうして形体は地より稟（う）ける所なり。……故に曰く。（胎児が誕生に至るまでには）一月して膏、二月にして膚、三月して胎、四月にして肌、五月にして筋、六月にして骨、七月にして成り、八月にして動き、九月にして躁しく、十月にして生ず。形体以つて成り、五蔵すなわち形なす」（精神訓）



ここにおいて、「精」は「神」と合体させられて「精神」となり、肉体と並ぶ人間存在の根拠、スピリチュアル性を付与されている。根源的な生命エネルギーの真実在性よりも、天＝陽に帰属する霊的要素が強調され、人が死ねば「精神」は、天の門に入るという金谷修著『淮南子の思想』段階にはなかった考え方で、人間の霊性への関心の構造的な探求である。このような新たな意味を付与された「精神」概念が盛んに議論されるのが『淮南子』なのである。

◇黄老思想の総括書『春秋繁露』

『淮南子』が武帝に献上されたころ、首都長安では儒者、董仲舒が活動を始めていた。彼は、強固な中央集権国家に適した統一思想を儒学によって構築しようと、『春秋繁露』（現存17巻82篇）を執筆したとされる。

『春秋繁露』は、孔子、孟子の天への崇敬を極端化し、天は地上の王に権力を与えた、帝王は「天子」だという王権神授説を唱えている。「天地—国家—身体」を貫く宇宙論的神学体系を構想し、儒家を軸に、墨家、道家、法家、陰陽・五行論、周易、数術、そして医家の思想をも取り入れている。政治は四季の運行と天地陰陽、五行の法則に従うべしと天道思想を強調しつつ、災異思想を導入し、王権の暴走に歯止めを掛けてもいる。天人相関論を徹底させ、人の数と天の数は対応するとし、人身の骨、関節、五蔵、四肢なども1年の日数、月数、五行、四時（春夏秋冬）の数と同じだ主張したが、それは『黄帝内経』の思想に瓜二つである。

『春秋繁露』は、従来、儒家思想としてのみ扱われてきた。現在は、先行する諸子百家思想を儒学で最終的に統一した総括書として、黄老思想と関連させる解釈が目立つ。論述の動機には、『淮南子』への対抗意識があったとする研究者もいる（池田知久「儒教の国教化と『淮南子』」『知のユーラシア3 激突と調和 儒教の眺望』明治書院、2014）。そうかもしれない。ここでは、「精」の議論に限るが、上に見たように、『淮南子』は、スピリチュアルな「精神」概念により、新たな生命観、人間観を打ち出したが、『春秋繁露』には、同様な「精神」の用例は1個所しかない。以下の引用が示すように、むしろ『管子』『呂氏春秋』の根源的な生命エネルギー観を踏襲する「精」概念が展開されている。

「天は衆精（＝多くの精）を積みて以て自ら剛（つよ）く、聖人（＝ここでは帝王）は衆賢（＝多くの賢者）を積んで以て自ら強し。天は日月星辰を序し（＝秩序を調べ）て以て自ら光り、聖人は爵録を序して以て自ら明らかなり。天の剛なる所以は、一精の力に非ず。聖人の強き所以のものは、一賢の徳に非ざるなり。ゆえに天道はその精を盛んにするに務め、聖人はその賢を衆（おお）くするに務む。その精を盛んにしてその陽を壺にし（一、＝集中して高め）、その賢を衆くしてその心と同じくす」（『春秋繁露』立元神）

「気の清きものを精と為す。人の清きものを賢と為す。身を治むる者は、精を積むを以て宝と為し、国を治むる者は、賢を積むを以て道と為す。……夫れ精を致さんと欲する者は、必ず其の形（＝肉体）を虚静にし、賢を致さんと欲する者は、必ず其の身を卑謙す。形静かにして志し虚なる者は、精気の趣く所なり。謙尊して自ら卑くする者は、仁賢の事（つか）うる所なり」（通国身）

「春は生じ夏は長じ、百物以て興（おこ）る。秋は殺し冬は収め、百物以て藏す。故に気より精なるは莫（な）く、地より富むは莫く、天より神なるは莫し。天地の精の以て生ずる所の物は、人より貴きは莫し」（人副天数）

さて、ここまでの展開に読者はうんざりしたかもしれないが、これは『黄帝内経』を、戦国末～前漢中期の黄老文献の気の思想の系譜に位置づけるための基礎固めだったのである。こうして、わたしたちは『黄帝内経』の気概念展開を、遙か遠い、戦国末の時空に繋がるものとする事ができる。『黄帝四経』の素朴な「気」概念の延長に『管子』で練り上げられ、『呂氏春秋』『春秋繁露』に引き継がれた宇宙や人体を生成する根源的な生命素「精」の概念は、『黄帝内経』において次のように使用されている。

「両神（＝男女両性）相搏（まじ）わり、合して形を成す。常に身に先んじて生ずるを是れを精と謂う」（『靈枢』決気）

「人始めて生ずるや、先ず精を成し、精成りて脳髓生ず。骨を幹と為し、脈を営と為し、筋を剛と為し、肉を墻（しょう＝垣根）と為し、皮膚堅くして毛発長ず」（『靈枢』経脈）


「五蔵は四時に応ず…東方は青色、入て肝に通ず。竅を目に開き、精を肝に蔵す。…南方は赤色、入りて心に通ず。竅を耳に開き、精を心に蔵す。中央は黄色、入りて脾に通ず。竅を口に開き、精を脾に蔵す。…西方は白色、入りて肺に通ず。竅を鼻に開き、精を肺に蔵す。…北方は黒色、入りて腎に通ず。竅を二陰に開き、精を腎に蔵す」（『素問』金匱真言論）

そして、『淮南子』的なスピリチュアル性を伴う「精」すなわち「精神」は、次の文章の末尾で語られている。

「上古に真人なる者あり。精気を呼吸し、独り立ちて神を守り、肌肉一の若し。故に能く寿は天地を敝（つく）し、終る時あることなし。……中

古の時、至人なる者あり。陰陽に和し、四時に調え、世を去り俗を離れ、精を積み神に全く、天地の間に遊行し、八達（＝八方の遠方）の外を視聴す。……その次に聖人なる者あり。天地の和に処（お）り、八風の理に従い、嗜欲を世俗の間に適（かな）え、恚嗔（いしん＝怒り）の心なく、行いは世を離るるを欲せず。……外、形（＝肉体）を事に勞せず、内、思想の患いなし。恬愉（てんゆ＝静かな喜び）を以て務めとなし、自得を以て功となし、形体敝（ほろび）ず、精神散ぜず、また百を以て数うべし」（『素問』上古天真論）

今回は、『黄帝四経』の「黄帝」思想すなわち天道思想が、現存の『黄帝内経』に流れ込んでいく様子を点検する。その作業は、『黄帝内経』がまごうことなく黄老の潮流とともに誕生してきたことを示してくれるだろう。

 ツイート { 2 }

★この記事に対するご意見やご感想をお寄せください»» [Click Here!](#)

[HOME](#)

HUMAN WORLD
ヒューマンワールド

[書籍](#) | [DVD](#) | [CD-R](#) | [セミナー](#) | [お宝市場](#) | [求人天国](#)
[株式会社 ヒューマンワールド](#)

東京都西東京市田無町7-18-4 TEL.042-444-3678 FAX.042-462-1231

Copyright(c) Human World Co.,Ltd. All rights reserved.